

# モノ不足地域におけるブリコラージュの実践

## ー キューバ共和国 インベントによる住居空間の構成 ー



### Keywords

インベント ブリコラージュ モノ不足  
社会主義 増改築 DIY

AK15098 山中 怜典

## 1. はじめに

### 1.1. 研究背景

現代の日本において、一般的に一軒家、集合住宅の種類に関係なく、居住空間には個性が乏しい。設計から工事竣工まで、居住者はその過程にほとんどたずさわることなく居住空間はつくられることに加え、住宅そのものが大量生産品だからである。しかし、居住者は、そうした無個性な空間にさまざまな耐久消費材である大量生産のモノを配置し、使うことによって、その空間を固有のものに変えていく。一方で、モノが慢性的に不足する地域もある。その場合、日本でみられるような上記のモノと居住空間の関係がどのようになっているのか、居住空間を少量のモノによって固有化することに加え、その土地の生活や文化をどのように居住空間に反映させているのかが問題となる。また少量のモノによってどのように多岐に渡る生活様式に対応していくかが問題となる。

### 1.2. 研究目的

現代日本のように、モノが潤沢かつ住居プランも地域によってあまり差がない国では、モノによって居住空間は固有化する。本研究では、モノが不足する国を対象とする。また、グローバル化の影響を強く受けている地域では、建物自体が均質化しており、日本と大きな違いがないと考えられる。そこで、グローバル化の影響をあまり受けていない国を対象とする。さらにグローバル化の影響が強い地域では、生活様式そのものが標準化されている。居住空間に生活様式や文化がどのように反映されているのかを明らかにするためには、グローバル化の影響が少ない地域を選定する必要がある。モノが希少な環境下において、日常生活を営む上であらゆるモノを本来の用途とは異なる方法で利用していると考えられるからである。再利用や代用することで生活に足りない要素を補うことは、C・レヴィ＝ストロースが提唱したブリコラージュの概念に相当する。住居空間や建具といった生活に関わる要素をブリコラージュによって補うと考え、本研究は、そこに住む人々が自分たちの居住空間を組織する際、居住者の思想や個性、生活様式の反映の仕方を分析し、ブリコラージュの様態を考察する。

## 2. 研究方法

### 2.1. 調査地の選定

#### 2.1.1. キューバの歴史

モノが慢性的に不足しており、経済発展が進んでいない事例として、本研究ではキューバ共和国（以下、キューバ）のハバナを研究対象地に選定した。キューバは1902年に独立し現在に至るまで貧困状態が続いている国である。表1にキューバの略史を示す。

表1 キューバ略史

|       |                      |
|-------|----------------------|
| 1942年 | コロンブスが到達             |
| 16世紀  | キューバに於ける砂糖産業開始       |
| 1511年 | スペイン植民地化             |
| 18世紀  | スペイン帝国の自由貿易港として繁栄    |
| 1868年 | 第一次独立戦争              |
| 1895年 | 第二次独立戦争              |
| 1898年 | 米国の軍政下に入る            |
| 1901年 | キューバ共和国憲法制定          |
| 1902年 | 独立                   |
| 1959年 | キューバ革命               |
| 1961年 | 米国との国交断絶・社会主義宣言      |
| 1962年 | キューバ危機・OASキューバ除名決議   |
| 1965年 | キューバ共産党結成            |
| 1972年 | COMECON加盟            |
| 1976年 | フィデル・カストロが国家評議会議長に就任 |
| 1989年 | 冷戦終結                 |
| 1991年 | ソビエト連邦崩壊             |
| 2014年 | アメリカとの国交回復           |
| 2017年 | アメリカから経済制裁を受ける       |

#### 2.1.2. インベント

1959年のキューバ革命以降、社会主義国家となったキューバは、アメリカの経済制裁を現在まで受けている。ソ連との関係を強固なものとしていたが、1991年のソ連崩壊によってキューバは未曾有の物資不足に陥る。キューバでは、この物資不足の状況下でインベントという概念が発展した。これは、スペイン語のInventar(発明する)を語源とし、ありあわせのモノや廃材を使って新しくモノを作り出す概念である。キューバでは、料理、建築、日用品など様々な分野でインベントがみられる。ソ

連崩壊後のロシアでは、国策として郊外にダーチャーという廃材などで建てられた小屋を建て食料難を自給自足で補った。キューバではこのダーチャーに相当するものがインベントで増改築、建設された住居や小屋である。

## 2.2. 調査方法

スラム街やブリコラージュに関するいくつかの先行研究によれば、モノ不足の地域において少量のモノや再利用によって居住空間の形成や道具の作成が行われている。また住居や道具が作成された社会背景や生活背景が居住空間や道具の性質にも反映されている。そこで本研究では、キューバのインベントを調査することでモノ不足の地域における住居空間の在り方を分析し考察する。

インベントはキューバ全土で普遍的にみられるため、特定の場所に絞らずに調査した。

調査期間は2019年9月3日から2019年10月1日までで、調査員は1人である。

### 2.2.1. インタビュー項目

主なインタビュー項目を以下のように設定した。

- ・家族構成
- ・インベントについて
- ・住居の情報
- ・暮らしについて

## 3. 調査地概要

### 3.1. ハバナ

キューバの首都であるハバナでは、10月10日通りより東側が旧市街、西側が新市街である。旧市街には17世紀から19世紀の住宅群が現在も多く残っている。観光地のエリアは行政によって雇用された大工や建築家によって保全や改修が行われている。しかし観光地から離れている地域は劣悪な住環境である。新市街にはキューバ革命後に建てられた住宅が多く、比較的中間層から裕福層の住民が多く住んでいる。図-1に新市街と旧市街の地図を示す。

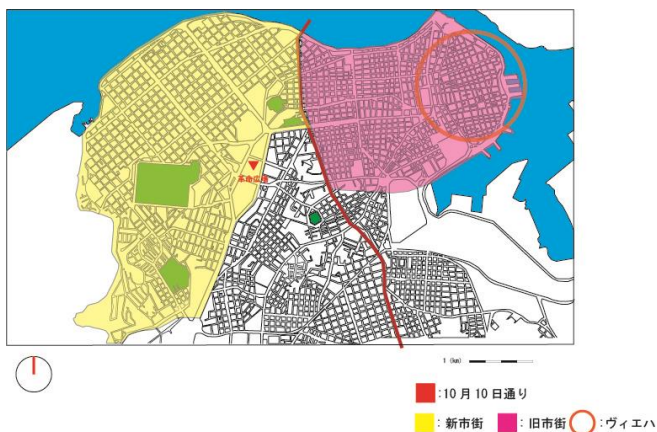


図-1 ハバナ旧市街と新市街

## 3.2. サンホセ・デラス・ラハス

サンホセ・デラス・ラハスは、ハバナから南東に向かって40kmに位置する。2011年までハバナの行政区内であったが、新たにハバナから分割されてできたマヤベケ州の都市となった。キューバ革命前までは、アメリカ、キューバ政府によるハバナの観光地化によって、ハバナ以外の地域にはインフラなどの整備はされず、革命後に現在の住宅群が整備される。ハバナ以外の地域ではボイオと呼ばれる椰子の木で建てられた住宅が多くみられた。

## 4. 調査結果

### 4.1. インタビュー結果

ハバナ旧市街2軒、ハバナ新市街5軒、ハバナその他地域2軒、サンホセデラスラハス8軒のインタビュー調査を行った。建具のインベントから住居空間のインベントまで、居住者によってインベントの規模は異なった。

## 5. 材料の入手経路

キューバの平均月収が約20CUCであるため、生活費に収入を回すことが多く、容易に新しく家具や家電を購入することはしない。そのため壊れたり、古くなったりしたモノは自分たちで直す。その際、部品が足りない場合、別のモノの部品などを転用する。そのため家具や家電をガレージに保管したり、壁や天井にくくりつけたりして保管する。

さらにキューバのほとんどの大工や建築家は公務員である。彼らは観光地である地域や政府機関の建物や地域に優先的に仕事があてられる。専門職である彼らを住居の増築や改修、新築で雇用すると、観光地や政府機関の建設が優先されるため一般住宅の仕事は時間がかかる。さらに材料も観光地や政府機関の建設を優先して使われるため、住民はインベントするためにモノを保管する。

調査した住居の中で、新市街の集合住宅では共用のガレージに古くなったり、壊れたりした家具や家電、車の部品が保管されていた。集合住宅の住民がインベントをする際にはこのガレージから自由に部品やモノを持ちだしてインベントの部材として利用する。

保管した家具や家電だけではなくごみ集積所にあるモノや道端に落ちているモノもインベントの部材として利用する。道端やごみ集積所に落ちている材料は不衛生であるため、インベントの材料として用いられないことも多いが、旧市街のセントロや田舎では持ち帰ってインベントに使われることが多い。今回の調査の滞在中に、ごみ集積所から、木材やテーブルといった家具を持ち帰る人々の様子も見ることができた。また道を歩いている際、多くの歩道で、長い木の木材や鉄骨が並べてある様子も見ることができた。

また、建物も老朽化しても増築や改築によって随時、



修復するが、建物が取り壊しされる際、使われていた家具や家電、建物の一部を袋に詰めて近隣のコミュニティに配布している様子も見られた。このように、材料は道やコミュニティから入手することもできる。写真1に建物の取り壊しを行っている際、近隣住民に廃材を配布している様子を示す。

ハバナ内においても旧市街や新市街のインベントに使われる材料の入手先は異なる。

図-2に道路でみられたインベントに使われる材料の地図を示す。



写真1 近隣の人々に廃材を配布している様子

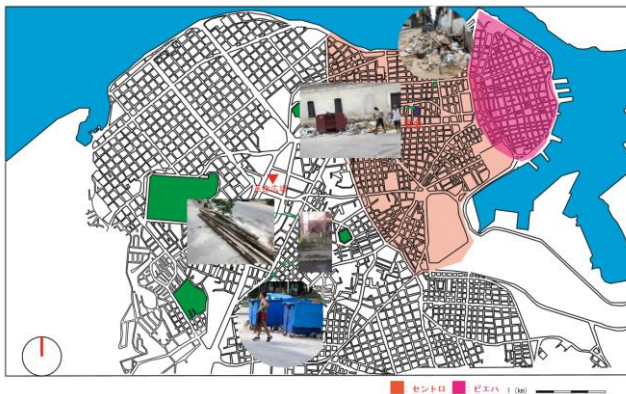


図-2 材料の入手経路

## 6. インベントによる住居空間の構成

### 6.1. キューバの住居空間構成

本論では新市街、旧市街、その他のハバナの地域、サンホセ・デラス・ラハスにて調査を行った。キューバ全土の一般的な住宅の多くは狭小な土地に建てられている。住宅には、応接間、台所、寝室、浴室がある。台所は2つあり1つは調理をする場として使われ、もう一方の台所では野菜や果物を洗う場として使われる。浴室とトイレが同じ部屋にある。個室に浴室がある。しかし個室が無い住宅も多くあり、その場合、寝室に浴室やトイレが設けられている。旧市街は17世紀から19世紀の建物が現在も多く残されている。1戸の集合住宅が分譲されて使

われている。

新市街はキューバ革命以降に建てられた住宅が多く、中間層から富裕層が多く住んでいる。旧市街と異なり個室がある住居が多く存在する。ピロティがある住居も多くありピロティにゆりかご椅子を持ってきて過ごしている人が多く見られた。またピロティの有無に関係なく、玄関から入ると応接間がある。応接間で過ごす人々が多い。応接間には窓が設けられている。敷地はフェンスで囲われているがピロティや応接間で過ごす人が多いため、外部との接触が頻繁にみられた。キューバは年間を通して気温が高いためピロティや窓を開けた状態で、応接間で過ごす。キューバはフィデル・カストロ政権から娯楽が厳しく制限されているため、こうした外部で過ごすことで地域の人や友人が集まって過ごすことが多い。

サンホセ・デラス・ラハスの住居は新市街と間取りに大きく差異はなかったが、ハバナと比べて敷地が広いために庭が広く、家畜を飼っている住居が多かった。図-3に新市街と旧市街の空間構成を示す。



図-3 新市街と旧市街の住居の空間構成

### 6.2. インベントによる増築・改築

社会主義国家であるキューバは、政府から住居を割り当てられてしまう。居住者の生活様式や家族構成に基づいて住居空間が構成されているとは限らない。そのため人々はその住居で暮らしていく上で、家族形態や居住者の思想によって住居空間を増築、改築していく。インベントを通して自ら、増築、改築を行うことは、作業過程の途中に、最初に考案していた目的に変化が生じたとしても、随時対応することが可能である。

居住者が増えるにあたり住居を増築しなければならない。また、17世紀から19世紀の建物が多く残る旧市街や、田舎であるサンホセでは建物の老朽化が進んでいる。そのため改築も頻繁に行われている。しかし、多くの住居が大工など公務員を雇うと費用と時間がかかるためインベントによって増築、改築されている。本調査では3か所の住居のフィールドワークを行ったが、新市街は中間層から富裕層が多く住んでいるためインベント業者を雇っ

たり、材料を購入していたりしているため、専門職が建てたように精巧にインベントはされている。インベントに費用を多く費やしている住居では材料などが露呈することなく、装飾のような細かい部分に渡って精巧に住居空間はインベントされている。インベント業者を雇った住居を見ると住居空間は精巧に作られており、インベントを生業としている業者ではブリコラージュのような要素が薄く、技術者としての側面のほうが強い印象を受けた。

居住者が住居が自らインベントによって増築や改築した住居はブリコラージュの要素が強く、廃材や壊れた家具などが目視で確認できるほどである。

インベントによる増築や改築においても、居住者が使用できる程度までインベントするのか、それとも装飾といった細部までインベントするかは住居によってそれぞれらつきがある。インタビューでも多く得た「建具や空間に思想の反映は特にない」や「使えれば何でもよい」といった回答からキューバ人は住居もモノと同じような認識があると考えられる。

### 6.3. インベントによる建具

建具は缶の食器入れといった小規模のインベントからクローゼットのようなインベントまで多く見れた。建具も空間同様、部材が露呈しているインベントもあるが色を塗るといった装飾がされているインベントもある。建具のインベントは居住者の利便性や生活様式が強く反映されていると考えられる。

建具は最低限の機能を持った建具が多くみられた。材料に使われる部材として鉄棒や木片といった木材が共通して見られた。またドアやクローゼットといった家具をインベントする際には、同じ機能を持った家具が複数用いられている。そのため、引き出し部分に隙間が多くあったり、取手の種類が異なったりしている。細かい部分に木片を用いたりして補強しているところも多くある。

## 7. インベントと住居空間の関係性

### 7.1. 現代のインベントの建築的意味論

インベントはソ連崩壊後、未曾有の物資不足の状況下で多岐に渡り、足りない要素を廃材や本来なら使われない素材などを材料として使い、足りない要素を補いながら新しくモノを作っていく行為を指していた。インベントはブリコラージュと類似する点が多い。しかし時間の経過とともに、インベントはインベントする者が自ら新しくモノや行為を作り出すことそのものに変化していったと考えられる。建築的視座においても、使われている部材の材料が異なり、使う材料に寄せて建物や建具をインベントしている住居ではブリコラージュ的側面を持ち合わせていて、ソ連崩壊後にみられた、インベントの概念に近いと考えられる。その一方、インベントに費やす

費用が多い住居は住居や建具など、使われている部材が購入されている材料もあり、計画的に使われていると考えられ、DIY的側面を持っている。ソ連崩壊後から約30年経った現在、当時と比べて社会情勢は改善され、材料が入手しやすくなった。廃材や古い家具を使わなくとも、安価な値段で建築資材を購入することができるようになったからである。しかし、平均賃金も低く、モノ不足の状況は続いているため、モノの修理や、作製は現在も日常的に行われている。日常生活を営む中でモノ作りの技術は培われる。購入した材料と中古品や廃材の転用といったことが混ざりあって現在のインベントに発展していると考えられる。

## 8. まとめと今後の課題

今回の調査でみられたのはキューバでのインベントの実態である。インベントが発展したソ連崩壊後の当時の状況に比べると、現代のインベントは居住者自身が生活に関わる機能をインベントによって構成していく様子であった。そのため、当時のインベントでは生活するために少ないモノを駆使して、様々な生活に必要な要素を補っていくことであり、インベントはブリコラージュ的な要素を多く持っていた。しかし現代のインベントは、ブリコラージュ的側面は維持しながら、モノが潤沢になり正規の材料が購入できるようになったため、技術者の側面も多く持つようになったと考えられる。これは、インベントの材料を収集する段階であらかじめ計画的に設計のような思考の下、材料を収集するようになり、インベントを行うことが可能になったからだと考える。よってインベントはブリコラージュ的側面を持ちながらも、技術的な側面も備わっていると考えられる。

今後の課題として、ソ連崩壊直後ではどのようなインベントが住居空間において行われたか。また近年の経済発展により、人々の生活が豊かになりつつあるが、今後はインベントの持つブリコラージュ的性質が維持されるか考察していきたい。

### 参考文献の書き方

- 1) 牧野冬生, 他2人「メトロマニラ貧困地域における住居及び居住形態に関する研究 国際援助活動における建築人類学の応用」住宅総合研究財団研究論文集, No32,2005
- 2) C・レヴィ＝ストロース著「野生の思考」, みすず書房,1976
- 3) 飯田卓「ブリコラージュ実践の共同体」 文化人類学 75巻,1号, 2010
- 4) 石山修武,中里和人「セルフビルドの世界 家やまちは自分で作る」ちくま文庫,2017
- 5) 越野武 他7人「サハリンの住宅における歴史的背景と住居環境に関する研究 戦前樹住宅と現代のライフスタイル」住宅総合研究財団研究論文集, No27,2001